PMR 資格試験への挑戦　1
P2M 資格受験の過程で実感した自己の成長

中電シーティーアイ　プロジェクト第 3 ユニット　管理部　主査
加藤　佑樹

■　受験動機

電力会社である親会社が、法的分離対応により大小 150 程度のシステムに対して同時期に再開発・改修を実施する必要に迫られ、運用開始日に問題無くカットオーバーさせることを目的として立ち上げられた PgMO 組織のメンバーに任命されたことが P2M 資格試験を受験するきっかけでした。これまで PgMO に対しての知見がなく、社内でも前例のない取組みであったため、PMC・PMS 資格試験を受験する過程の中でプログラムに関する体系的な知識を取得できたことは業務遂行において有益でした。今回、自身のプログラムマネジメントに対する実践を振り返るため受験することを決めました。

■　受験の感想

PMR 試験は、長時間に渡って様々な切り口の設問に対して意見を述べる必要があり、常に時間的プレッシャーの中で結論を導き出さなければいけませんでした。問題はかなり綿密に考えられており、試験ではあるものの、論述試験やグループ討論の経験を通じて勉強になる点も多かったと感じています。PMS までは知識ベースであるのに対して、PMR は論述や討論等の実践力が求められるため、そこが難しい部分でもあり面白い部分でもありました。

試験に臨む上では 3 つのポイントを意識しました。

1 つ目は「どのような状況であったとしても、必ず何かアウトプットすること」です。特に論述試験では短い制限時間内に回答を記述する必要があり、筆が止まってしまうと指定された文字数や回答数を満たせなくなるため、追い込まれた場面での決断力が重要となります。

2 つ目は「P2M のフレームで考えてみること」です。問題は様々な分野から出題されるため、中には普段の業務内容とは全く異なり経験則から考えることができないものもあります。そんな時に P2M のフレームで考えた場合どうなるか？という観点で考えることで、どのようなケースでも回答を導き出すきっかけが見つかります。P2M で解説されているプログラムマネジメントの考え方の中でも「ミッションを明確にして、ありのままの姿とあるべき姿からプログラムをデザインしていく」手法は、全ての仕事で適用可能と思います。

3 つ目は「1 つ上の視点で考えること」です。プロジェクトマネジメントのスキルも問われますが、どちらかというと PMR ではプログラムマネジメントの観点や経営層の立場で考えることができているかを重視しているように感じました。

■　PMR としての展望

合格後は、PMR 資格取得に至るまでの知識や経験を活かし、品質保証部と開発部の橋渡し役となる部門内 PMO として、部門内の PJ に対する品質保証活動を横断的に推進していきたいと思っています。

【プロフィール】　加藤　佑樹（かとう　ゆうき）
大手電力会社のお客さまサービスシステムの開発・保守業務を経験後、2018 年 10 月より法的分離対応の PgMO 組織メンバーとして、大小 150 あまりのプロジェクトに対して 2020 年 4 月運用開始に向けたプログラムマネジメントを遂行。現在は、営業コンサルティングとして企画業務を行うとともに、部門内 PMO として品質保証管理業務を兼任。